国営伊那西部農業水利事業

—緊急発掘調査報告—

桜畑遺跡

1981

伊那市教育委員会
関東農政局伊那西部農業水利事業所

国営伊那西部農業水利事業

―緊急発掘調査報告―

桜　畑　遺　跡

1981

伊　那　市　教　育　委　員　会
関東農政局伊那西部農業水利事業所

序　文

霊峰経ヶ岳山麓より眺望する西箕輪地区には数多くの遺跡が密集して存在している。その分布状態を概観してみるに，現在の集落と近接した距離の所に位置していることがうかがえ，古代人と現代人と比較して，居住地の変遷は大きく変わっていないことが理解できる。

今回発掘した西箕輪吹上桜畑遺跡は，大泉川に位置し，山麓扇状地の発達の顕著な絶景の地である。西に経ヶ岳より連なる大泉所山が聳え，東に南アルプスの連山が美しい姿を現わし，四方連山に囲まれた自然景観の最も富んだ地域と言えよう。古代の人々はこの展望よき地に住居を構え，朝に夕に自然の幸を狩猟，採集し，やがては農耕をして生活を営んでいたことであろう。

昭和55年度西部送水管工事事業が実施されるに当たり，この地が埋蔵文化財の包蔵地として指定されていたので発掘調査を実施した。調査の成果は報告書の中に記載してある。

調査に当られた先生方の御苦労に対し，心より御礼を申し上げる。この間多くの地元の皆さんの援助を得て着々と作業が進められたことも共に感謝に耐えない。

この調査が順調に進み予期以上の成果を収め得ることの出来たのは，県文化課臼田指導主事の御指導によるところであり，深く感謝する次第であります。

酷寒の中，時には風雪の日も精意をもって調査にご尽力下された関係者各位の皆様に厚く御礼申し上げます。

昭和56年３月18日

伊那市教育委員会

教育長　伊　沢　一　雄

例　　言

1　本書は，昭和55年11月27日から12月６日までにわたって発掘調査された長野県伊那市西箕輪吹上997—2，1041，1042—1，11127—1番地に所在する桜畑遺跡の調査報告書である。

2　この調査は，西部送水管工事事業に伴なう緊急発掘で，事業は関東農政局伊那西部農業水利事業所の委託により，伊那市教育委員会が実施した。

3　本調査は，昭和55年度中に業務を終了する義務があるため，報告書は図版を主体とし，文章記述もできるだけ簡略にし，資料の再検討は，後日の機会にゆずることにした。

4　本書に挿入した遺構，遺物の実測図作製は，飯塚政美，小木曽清，小平和夫が行った。

5　本書に掲載した写真は，飯塚政美，小木曽清が撮影したものを使用した。

6　本書の執筆は，文責を文末に明記した。

7　本書の編集は，飯塚政美が行った。

8　本遺跡の資料は，伊那市教育委員会の責任下に保管されている。

なお，本遺跡調査に関して，県教育委員会臼田武正指導主事には，調査に関し適切な御指導をいただき，更に地元の方々からは物品両面にわたる御援助を賜わりここに厚く御礼申し上げます。

本　文　目　次

序　　文
例　　言
本文目次
挿図目次
表 目 次
図版目次

第Ⅰ章　発掘調査の経緯……（ 1 ）

第１節　調査に至る動機……（ 1 ）
第２節　調査の組織……（ 1 ）
第３節　発掘調査日誌……（ 2 ）

第Ⅱ章　遺跡の環境……（ 3 ）

第１節　地理的環境……（ 3 ）
第２節　考古学的環境……（ 3 ）
第３節　歴史的環境……（ 4 ）

第Ⅲ章　遺　　構……（ 7 ）

第１節　住居址……（ 9 ）
第２節　土　壙……（ 10 ）
第３節　ロームマウンド……（ 11 ）

第Ⅳ章　遺　　物……（ 12 ）

第１節　土　器……（ 12 ）
第２節　石　器……（ 13 ）

第Ⅴ章　ま と め……（ 14 ）

挿　図　目　次

第１図　桜畑遺跡の位置と西箕輪地区遺跡分布図……（ 5 ）
第２図　遺構配置図……（ 7 ）
第３図　第１号住居址実測図……（ 9 ）
第４図　第１号土壙実測図……（ 10 ）
第５図　第２号土壙実測図……（ 11 ）
第６図　第３号土壙実測図……（ 11 ）
第７図　第１号ロームマウンド実測図……（ 11 ）
第８図　土器実測図……（ 12 ）
第９図　土器拓影……（ 12 ）
第10図　石器実測図……（ 13 ）

表　目　次

第１表　西箕輪地区遺跡一覧表……（ 6 ）
第２表　伊那市内の縄文前期後葉から縄文中期初頭の埋甕炉住居址一覧表……（ 15 ）

図　版　目　次

図版１　遺跡全景
図版２　遺　　構
図版３　遺構及び遺物出土状況
図版４　出土遺物

第Ⅰ章　発掘調査の経緯

第1節　調査に至る動機

今回の緊急発掘を行う発端は，昭和55年度に実施する西部送水管工事事業にともない，送水管がこの桜畑遺跡を通る恐れが生じ，それにともなって，同遺跡が破壊されることが明らかになったために，伊那市教育委員会は県文化課臼田武正指導主事の指導をお願いして，昭和55年9月26日に遺跡発掘地区の範囲確認と，それにともなう予算算出を実施した。

昭和55年10月22日　西箕輪吹上公民館にて地主に発掘調査の意義及び日程等について説明を行い，発掘調査実施の協力をお願いする。

昭和55年10月29日　西箕輪公民館にて地主の発掘承諾書をいただく。

昭和55年11月6日　文化庁長官宛で発掘通知を提出する。

昭和55年11月17日　伊那市長と関東農政局伊那西部農業水利事業所長との間で「埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書」を締結し，契約後，ただちに発掘準備にとりかかった。

第2節　調査の組織

桜畑遺跡発掘調査会

調査委員会

委員長	伊沢　一雄	伊那市教育委員会教育長
副委員長	福沢総一郎	伊那市文化財審議委員会委員長
委員	赤羽　映土	伊那市教育委員長
調査事務局	三沢　昭吾	伊那市教育委員会教育次長
〃	石倉　俊彦	〃　社会教育課長
〃	柳沢　一男	〃　〃　課長補佐
〃	武田　則昭	〃　〃　係長
〃	沖村喜久江	〃　〃　主事

発掘調査団

団長	友野　良一	日本考古学協会会員
副団長	根津　清志	長野県考古学会会員
〃	御子柴泰正	〃
調査員	飯塚　政美	〃
〃	福沢　幸一	〃
〃	田畑　辰雄	〃
〃	小木曽　清	宮田村考古学友の会会長

調　査　員　小平　和夫　　長野県考古学会会員

第3節　発掘調査日誌

昭和55年11月27日　前の現場の西春近井の久保，井の久保遺跡より発掘器材を西箕輪吹上，桜畑遺跡へ運搬する。西部送水管請負業者大東組の協力を得て，発掘地区のすぐ近くにテントを建てさせてもらう。

昭和55年11月28日　トランシットを使用して基準杭を決め，グリットを設ける。発掘区域が5m幅だけなので，グリットのなかには派数のものもみられたが，一様一グリットして考えた。

昭和55年11月29日　本日より本格的なグリットの掘り下げを開始する。掘り下げてみると耕作土の下層は想像していたよりも西山の押し出しの影響が少なくて割合に安定していた。遺物は土器が数片出土した。

昭和55年12月1日　昨日，同様に発掘作業をつづけていくとA11に落ち込みがみられ，第1号土壙とする。幅が5mと決められているので，発掘の進行度は速かった。

昭和55年12月2日　発掘作業を北へ，北へと進めていくとB28，B31～B32に落ち込みがみられ，第2号土壙，第3号土壙と命名する。さらにB30にロームマウンドがみられこれを第1号ロームマウンドとする。

昭和55年12月3日　第1号土壙から第3号土壙及び第1号ロームマウンドの全掘完了。グリット設定の基準杭より南側を掘り進めていくとA′4に落ち込みがみられ，第1号住居址とする。限られた用地内なので住居址の西半分しか発掘できなかった。

昭和55年12月4日　第1号住居址のプラン確認とその掘り下げを実施する。第1号土壙から第3号土壙を，第1号ロームマウンドの清掃及び写真撮影を済せる。

発　掘　風　景

昭和55年12月5日　第1号住居址の掘り下げを完了する。第1号土壙から第3号土壙，第1号ロームマウンドの実測を終了する。

昭和55年12月6日　全測図の作成，テントのとりこわし，発掘器材の運搬を行う。本日をもって一応，桜畑遺跡発掘調査を完了する。

（飯塚政美）

第Ⅱ章　遺跡の環境

第1節　地理的環境

桜畑遺跡は長野県伊那市西箕輪吹上にある。桜畑遺跡に至るまでの経路は二つの場合が考えられる。一つの方法として，国鉄飯田線伊那市駅を下車して，国道153号線を北へ約4.5km程行って，北殿附近で，左折して西へ5km程行くと遺跡地に到着する。左折して遺跡地に行くまでの途中に南箕輪村大泉部落，西箕輪大泉新田部落がある。

もう一つの方法としては，伊那市駅を下車して，西方へ向って，大萱，荒井線を4km程遡り，信州大学農学部を通過し，西箕輪支所付近にて西箕輪，辰野線を北へ3km程行くと吹上部落に出る。

西箕輪は伊那市の西部地帯に位置し，集落地帯は割合に標高の高い所に密集している。従って，その眺望は最も優れており，眼下に赤石山脈の主峰の一つと考えられている仙丈ケ岳，南駒ケ岳が連らなり，その前には赤石山脈の前方である伊那山脈の連山が南北に長くそびえ立っている。これらの連山の間をぬうようにして三峰川が流れ，最後に天竜川と合流する。天竜川は諏訪湖に源を発し，延々二百数十km流れて太平洋に注ぎ込んでいる。天竜川の両岸は複雑な景観を呈している。伊那市周辺では南北に細長い縦谷状地形，両岸に数段にわたる河岸段丘を形成している。

発掘地付近の微地形は大泉川左岸河岸段丘面にあたり，天竜川による大泉段丘と扇状地のいわゆる複合扇状地に位置している。遺跡地の基盤は大泉礫層と呼ばれているものがある。この礫層については上伊那郡誌自然篇を引用すれば次のようである。『伊那谷北部のいちばん広大な竜西地域の扇状地をつくっている礫層で，これを大泉礫層とよぶ。この礫層は，小沢川の中流与地付近大泉川の上流大泉付近，帯無川の上流等に見られる。厚さは20mm内外で，下位には，数枚の浮石層（火山灰の軽石がはさまれている。この扇頂部，たとえば小沢川の中流与地付近では，よく連続した粒度によって何層かに分けられる粗い礫層である。この礫層の岩種は，木曽山脈の経ケ岳以北の岩種であるが，花崗岩も多く円礫として含まれている。』

遺跡地の標高は900mを越えている。現在は桑畑に利用されている。西箕輪地区に限った地形的環境について述べてみよう。当地区の主たる山は木曽山脈と連なっている経ケ岳があげられよう。それに付随すのものとして吹上山麓，蔵鹿山脈，御射山山麓があり，それらの山麓傾斜度は割合に急である。従って，この一帯から下部にかけては大きな山麓扇状地を成し，土砂等の堆積が厚く覆っている。当地区の河川は北側から大泉川，大清水川，戸谷川，小沢川の四本だけであり，古くから住民は常に水不足に悩まされた。そのために各地に溜池がつくられ，非常時に備えている。

第2節　考古学的環境

西箕輪地区は経ケ岳山麓，標高760m位から1,000m附近までにわたって各時代の遺跡が分布しているが，その標高差による時代的な差違は顕著ではない。また，分布地域が，遺跡分布図を参考に

すれば一目瞭然であるが，大体４カ所に分類できる。

①～⑤は大泉川周辺，⑬～⑰は大清水川，⑥～⑪，⑱～㉕，㉘～㉚は山麓扇状地上，㉖～㉗は無名の多くの沢が入っている場所等であり，いずれにしろ，水利の便の良好な場所に集中していることを疑う余地は全くない状態であります。遺跡分布の内訳は旧石器時代３，縄文早期時代３，縄文前期時代３，縄文中期時代25，縄文後期時代４，縄文晩期時代３，弥生後期時代３，土師器７，須恵器10，灰釉陶器４，中世２である。

参考文献

長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書（伊那市内その２）昭和48年度
上伊那誌（自然篇）
上伊那誌（歴史篇）
塚畑遺跡（緊急発掘調査報告書）1976　伊那市教育委員会・関東農政局伊那西部農業水利事業所刊
中の原・古屋敷遺跡（緊急発掘調査報告書）1976　伊那市教育委員会・南信土地改良事務所刊
金鋳場・財木遺跡（緊急発掘調査報告書）1977　伊那市教育委員会・関東農政局伊那西部農業水利事業所刊
大萱遺跡（緊急発掘調査報告）1975　伊那市教育委員会・南信土地改良事務所刊
与地原・北割遺跡　1977　伊那市教育委員会・南信土地改良事務所刊
金鋳場遺跡（緊急発掘調査報告）1979　伊那市教育委員会
宮垣外・天庄Ⅱ・堀の内・小花岡遺跡（緊急発掘調査報告）1980　伊那市教育委員会・関東農政局伊那西部農業水利事業所刊

第３節　歴史的環境

ここでは標題からして，古代，中世，近世についてふれてみたいと思う。吹上地籍では，以前に布目瓦の出土があり，その出土状態は全く不明であったという報告がなされている。今回の発掘を契機に，その解明ができるものと，近くの古老に聞いたところ良くわからないとの解答であった。ただ，古老の言うのには『吹上山麓の一角に寺平と呼ばれている平坦の場所があるとのことであった』。吹上出土の布目瓦は布目の粗い，平安時代の瓦と考えられている。当時，瓦を利用する建造物としては寺院しかないと思われる。このことは前に述べた古老の話の寺平がクローズアップされてくる。この近くで，寺院を考えるとすれば，まず羽広にある天台宗の仲仙寺を考えてみなければならない。仲仙寺は平安時代に開基された寺で，伊那市では最も古く，郡下でも，駒ケ根市の光前寺とともに古い方に属する寺の一つである。以上のことからして，この瓦は仲仙寺に関係した寺院の瓦と思われる。

中世では経ケ岳山麓にある黒ノ城が第一にあげられよう。黒ノ城に関しては佐野重直著「南信伊那史料」がある。それには次のように記されている。『西箕輪村蔵禄ニアリ山上ニ保壘築工ノ痕ヲ存ス，永禄年中武田領ノトキ烽火台ニ用ヒラレ與力同心等月番交代ニテ守之且三遠尾ノ兵起ルトキハ杣路峠ノ番兵月瀬民部ノ発烟ヲ待テ受ケ継キノ要ニ供セリ（得替記云々）今呼テ黒ノ城ト云フヌ南方ノ山上ニハ城ノ越ト云ヘル古跡アレトモ由緒詳カナラズ』　（飯塚政美）

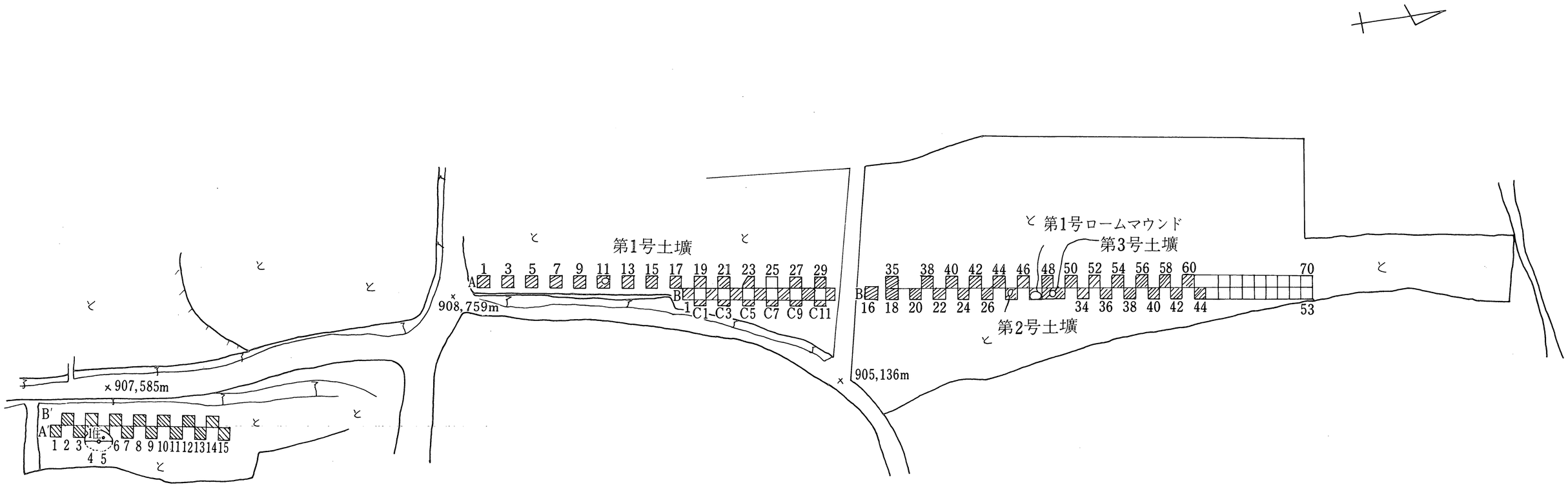
第１図　桜畑遺跡の位置と西箕輪地区遺跡分布図

遺跡の名称

① 中道南	② 桜畑	③ 久保田	④ 塚畑
⑤ 高根	⑥ 北割	⑦ 田代	⑧ 古屋敷
⑨ 金鋳場	⑩ 上溝	⑪ 蔵鹿山麓	⑫ 経ケ岳山麓
⑬ 西箕輪小学校北	⑭ 伊那養護学校	⑮ 熊野神社	⑯ 在家
⑰ 大萱西	⑱ 殿屋敷	⑲ 宮垣外	⑳ 天庄Ⅰ
㉑ 天庄Ⅱ	㉒ 上戸	㉓ 富土垣外	㉔ 堀の内
㉕ 小花岡	㉖ 中の原	㉗ 下の原	㉘ 与地山手
㉙ 与地原	㉚ 財木		

第1表　西箕輪地区遺跡一覧表

No.	遺跡名	所在地	旧石器	縄文時代						弥生時代			古墳時代		奈良・平安時代			中世	備考
				草	早	前	中	後	晩	前	中	後	土	須	土	須	灰	陶磁	(長野県遺跡地図番号)
1	中道南	吹上					○												
2	桜畑	〃					○												
3	久保田	大泉新田					○									○			
4	塚畑	〃					○									○			
5	高根	〃					○												
6	北割	羽広					○					○							(2602)
7	田代	〃					○												(2601)
8	古屋敷	〃					○					○							(2600)
9	金鋳場	〃					○								○	○	○		緑釉吹子 (2599)
10	上溝	〃						○	○						○	○	○	○	
11	蔵鹿山麓	〃	○																
12	経ケ岳山麓	〃																○	和鏡
13	西箕輪小学校北	大萱					○								○				
14	伊那養護学校	〃 8274	○													○			
15	熊野神社	大萱					○									○	○		(8678)
16	在家	〃 7438～7444外					○												(8679)
17	大萱西	大萱	○				○												
18	殿屋敷	梨ノ木					○								○	○			(2608)
19	宮垣外	中条			○	○	○	○	○			○			○	○	○		(2607)
20	天庄Ⅰ	上戸					○								○	○			(2606)
21	天庄Ⅱ	〃			○	○	○		○										
22	上戸	〃					○												
23	富士垣外	中条					○												
24	堀の内	〃			○	○	○	○	○										
25	小花岡	花岡					○	○							○	○			(2605)
26	中の原	中の原					○								○	○	○		
27	下の原	上戸					○												
28	与地山手	与地					○												
29	与地原	〃					○												(2609)
30	財木	羽広					○	○											



第2図　遺構配置図(1:500)

第１節　住居址

第１号住居址（第３図，図版２）

本住居址は発掘した地区内で，最南端部に位置して発見され，その全体の平面プランは東側は用地外の為に発掘不可能であったが，推定するに円形状プランを呈する竪穴住居址と思われる。ローム層を掘り込んで，構築してあり，規模は南北５m80cm，東西は用地外で発掘不可能であった。

壁は西で60cm位を測り，垂直に近い，南は15cm位で外傾気味を呈し，北側は30cm位で外傾気味を呈している。発掘調査が実施された南，西，北のそれぞれの壁面は凹凸が多く，礫が露出しており，崩落しやすくなっていた。

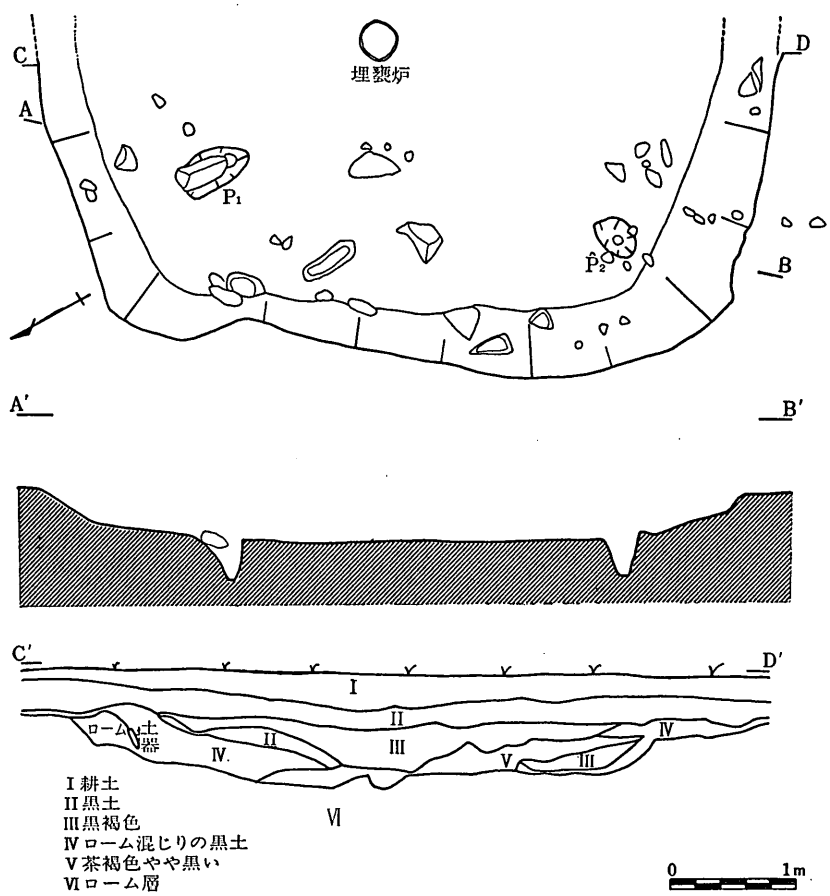
床面は礫混じりのローム層上面につくられ，かたく，礫が全面にわたってあった。炉は住居址全面の発掘調査が不可能であったので，正確なる位置は把握できないが，今までの通例からして，大般中央部に位置しているものと思われる。埋甕炉の形態を成し，正位の状態で甕を埋めてあった。

この土器は下半分は欠損し，割れ口は人為的に整形してあった。炉にしては焼土や木炭の検出は微量であった。

柱穴は現在では２ヵ所検出されたが，全面発掘を実施したならば４本は発見されるであろう。

本住居址は埋甕炉の土器からして縄文中期初頭に位置づけできると思われる。

遺物としては埋甕炉に使用された土器以外は何も出土しなかった。



第３図　第１号住居址実測図

第2節 土 壙

第1号土壙（第4図，図版2）

本土壙は発掘地区の凡そ，中央部附近に検出された。表土面より90cm位下った礫混じりの黄褐色土層を掘り込み，長円形状プランを成す土壙である。規模は南北4m17cm，東西1m10cm前後を測り，ところどころにとび出し部分が認められる。

壁高は40cm程あり，その状態は西壁では垂直に近く，凹凸が多い。南壁，北壁，東壁は内弯気味で，礫の露出が多い。

床面はかたく凹凸が多く，礫がところどころに露出していた。この礫のなかには変成岩も認められた。遺物の出土は何もなく，従って時代決定はできない。

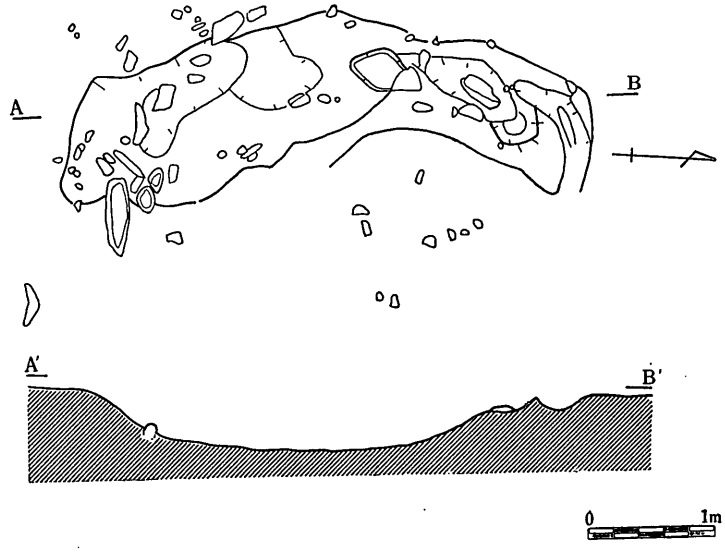
第2号土壙（第5図，図版3）

本土壙は発掘地区の最も北側に位置して発見された土壙である。平面形プランは東西に長く，南側は若干突び出してはいるが，全般的には長楕円形を呈しており，南北60cm，東西1m23cmの規模を有している。壁高は南で30cm位，内弯気味，軟弱である。北は20cm位，外傾気味，軟弱である。床面は大般水平で軟弱気味を呈している。また同面上に密着して，一抱え程もあるホルンヘルスがあった。遺物の出土は全く無く，時代決定は不可能である。

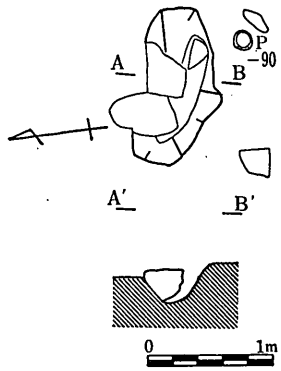
第3号土壙（第6図，図版3）

本土壙は第2号土壙の近くに発見された土壙であり，表土面より1m位下ったローム層面を掘り込んで構築してあり，その規模は南北1m15cm，東西94cmを有している。土壙の北側にあるピットは直接土壙とは関係がないと思われる。

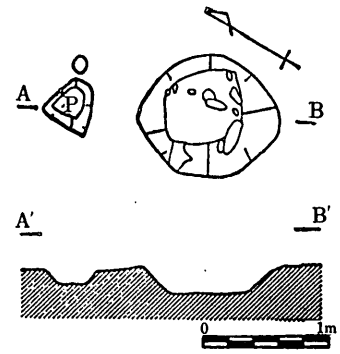
壁面は南では外傾気味で，凹凸が多く，かたい。人頭大位の礫を多く含んでいる。高さは20cm位を測る。北壁は外傾気味で，凹凸が多く，かたい。西壁は垂直気味で，凹凸が多く，かたくなっている。南壁と同様に壁面に人頭大位の礫を含んでいる。東壁は垂直気味で，凹凸が少なく，かたくなっている。遺物の出土はない。



第4図 第1号土壙実測図



第5図　第2号土壙実測図



第6図　第3号土壙実測図

第3節　ロームマウンド

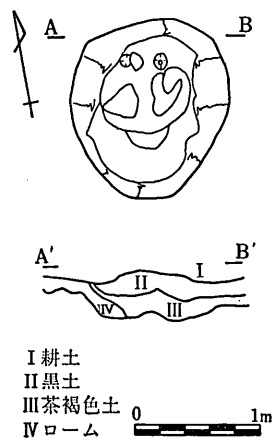
第1号ロームマウンド（第7図，図版3）

本遺構は，南は第2号土壙，北は第3土壙にはさまれた位置に発見された遺構である。この遺構の存在した地点は南から北へわずかに傾斜をしている突端部に位置している。

表土面より約1m位下ったローム層面に構築されたロームマウンドで，その規模は南北1m40cm位，東西1m28cm程である。マウンドの高さは20cm位で，割合に低く，また同遺跡の上面は起伏が多く，かたくたたかれていた。

マウンドの周囲の溝には黒土が充満し，その遺構の下にも黒色土が入り込んでいた。マウンドを構築してある土層は上から耕土，黒土，茶褐色土，ローム層の順序に堆積していた。

遺物の出土は何もなく，時代決定は不可能であった。　（飯塚政美）

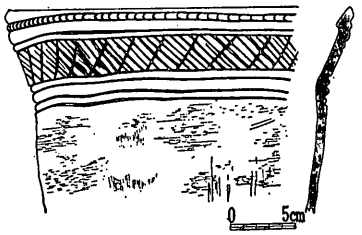


第7図　第1号ロームマウンド実測図

第Ⅳ章　遺　　物

第1節　土　　器　（第8～9図，図版4）

第8図の土器は第1号住居址の埋甕炉に使用され，正位の状態で出土したものである。口径は26.7 cm，器高は下部欠損のために不明である。下部の割れ口は埋甕炉に使用する時に人為的に廃品利用の形で切ったものと思われる。従って，割れ口の状態は割合に整っていた。



第8図　土器実測図

器厚は6 mm～1 cm内外を測定できる。口縁部は若干ふくらむ深鉢型土器である。口縁上部文様は沈線を数条横位に配し，沈線と沈線の間に連続爪形文をつけてある。口縁中間部文様は沈線を交叉状に工夫し，全般的に籠目状になっている。口縁下部文様は横位に沈線を数条施してある。胴部文様は無文帯で占められている。胴部の外面には炭化物の附着が多くみられた。

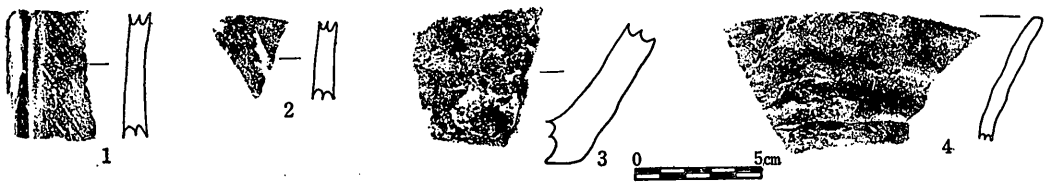
色調は全般的に黒褐色を呈し，焼成は良好で，胎土中に多量の長石を含んでいる。本土器は縄文中期初頭に位置していると思われる。

第9図の(1)は斜縄文地に断面三角形状の懸垂文が垂下している土器片である。黒茶褐色を呈し，焼成は良好で，胎土中に多量の雲母を含んでいるので，土器内外面ともに雲母のためにキラキラ輝いている。本土器は縄文中期後葉の加曽利E式と考えてもよいと思われる。

同図の(2)は内外面ともに無文地で占められている。色調は赤茶褐色を呈し，焼成は良好で，胎土中に多量の長石を含んでいる。加曽利E式と思われる。

同図の(3)は浅鉢型土器の底部破片であり，全部無文である。色調は黄褐色を呈し，焼成は不良，内面はザラザラしていた。加曽利E式の土器と思われる。

同図の(4)は外反する口縁部破片であり，全体的に中厚手に属していると思われる。文様は口唇部に近く所にわずかに縄文が施され，他は無文であった。黒褐色を呈し，焼成は良好で，胎土中に多量の雲母を含んでいる。時期は縄文後期中葉頃と思われる。



第9図　土　器　拓　影

第2節　石　　器（第9図，図版4）

本遺跡出土の石器は4点を数え，全て打製石斧である。石質は粘板岩製（1，2），緑泥岩製（3，4）である。1は表裏両面の中央部付近に節理が顕著である。下端部がやや開く撥形状を呈し，断面は磨切り状になっていた。

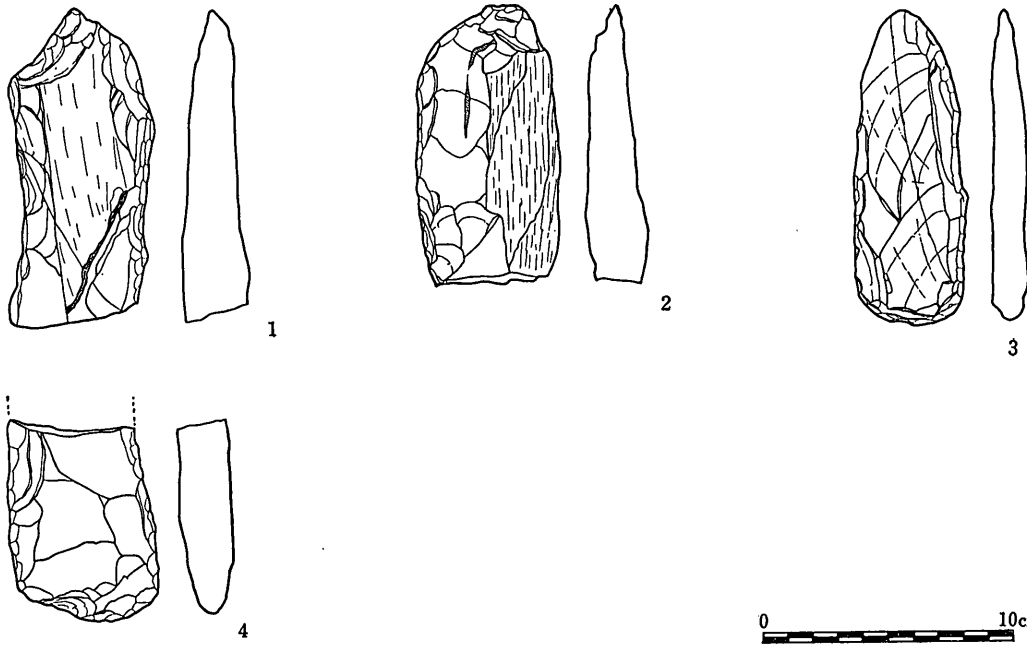
（2）は中央部に高い稜線が上下に走っている。刃部の調整は割合にラフであった。形態は短冊形を成していると思われる。

（3）は極めて断面が扁平で，全般的に調整は雑で，石斧としてはあまり良好でない。短冊形の部類に属していると思われる。

（4）は上部欠損であり，刃部の調整は割合に丁寧であって，下部がやや開く撥形に含まれると思われる。

4つの石器は全てグリット内出土である。

（飯塚政美）



第10図　石器実測図

第Ⅴ章　ま　と　め

本遺跡の調査日程は約１週間位で，発掘調査としては割合に短期間であった。当初で述べたように幅５ｍと限定された範囲内の発掘調査であったので，完掘できないこともあるものと覚悟を決めてかかった。限られた範囲内で検出された遺構は次のようである。遺構は住居址１軒，土壙３基，ロームマウンド１基であった。

第１号住居址は用地外へ伸びていたので，西側半分の調査ができただけであった。全面発掘は不可能であったが，推定するに円形プランを呈した竪穴住居址と思われる。

遺物は埋甕炉に使用された土器以外は何も出土しなかった。従って本住居址はこの埋甕炉の土器によって時代決定をするのが最良策であろう。それによると，本住居址は縄文中期初頭に属していると思われる。伊那市内に於ける縄文前期終末期から縄文中期初頭にかけての埋甕炉住居址一覧表は第２表に一割してまとめておいた。

土壙は，３基検出されたがいずれも遺物の出土は皆無であった。第１号土壙は礫混じりの層を掘り込んで構築してあった。第２号土壙と第３号土壙は隣接して検出され，両土壙内には人為的に置いた状態の石があり，土壙墓的要素がうかがえ，時間的差がないものとおもわれる。

ロームマウンドは１基検出され，第２号土壙，第３号土壙にはさまれたところに位置して発見された。土層の堆積より土壙墓的色彩が強いように思われる。距離的にみて，第２号土壙，第３号土壙，第１号ロームマウンドの三遺構は土壙群としてのとらえ方をした方が良いと思われる。

土器はほんの数片出土したのみであり，それは加曽利Ｅ式と，加曽利Ｂ式であった。

石器も土器同様４個出土したのみであった。それは全て打製石斧的用途を有していた。

調査団の各位が他に仕事を持っており，整理の段階では各自，忍耐と自己犠牲しなければならなかった。こうした努力によって本報告書が刊行されるに至ったが，短期間の調査及び報告書作製では，多くの反省面が生じてきた。　（飯塚政美）

第2表　伊那市内の縄文前期後葉から縄文中期初頭の埋甕炉住居址一覧表

住　　所	遺跡名	住居址番号	プラン	規模(m) 南北	規模(m) 東西	炉	比定時期	備　　考
伊那市西春近南丘	南丘A	3号	円形	5.0	4.9	方形石囲埋甕炉	加曽利E	(註1)
〃 東春近木裏原	北丘B	4号	不整円形	3.3	4.2	埋甕炉　中央や西寄り	勝坂	有孔鍔付土器出土 (註2)
〃 西春近中村・下島	中　村	8号	円形	3.45	3.5	埋甕炉	縄文前期終末	晴ヶ峰，踊場式に類似最西に発見(註3)
〃 西春近山本	常輪寺下	13号	円形	3.1	3.35	埋甕炉	平出3A	12号住に切られる (註4)
〃	〃	17号	円形	4.05	3.9	埋甕炉	阿王台	勝坂期の顔面把手出土 (註4)
〃 西春近南小出	カンバ垣外	1号	円形	3.0	3.0	埋甕炉　中央部	勝坂	3号住に切られる (註5)
〃	〃	4号	不整円形	2.8	不明	埋甕炉	平出3A	東壁が破壊される (註5)
〃 伊那下小沢	月見松	11号	円形	7.0	7.0	埋甕炉　2ヶ所	月見松A	9号住に一部を切られる (註6)
〃	〃	12号	隅丸方形	4.0	4.4	埋甕炉　中央部	月見松B	(〃)
〃	〃	20号	不明	不明	不明	埋甕炉	縄文中期初頭	切り合い 19.20.21.31号住 (註6)
〃	〃	22号	不明	不明	不明	石囲い埋甕炉	縄文中期初頭	(〃)
〃	〃	24号	円形	4.8	5.1	埋甕炉　中央部	月見松A	壁の確認にやや難あり (註6)
〃	〃	25号	円形	4.5	4.5	埋甕炉　中央部	月見松B	23号に切られる (註6)
〃	〃	49号	隅丸方形	3.7	4.0	埋甕炉	月見松C	48号住に切られる (註6)
〃	〃	56号	隅丸方形	4.0	4.0	埋甕炉	月見松C	(〃)
〃	〃	60号	楕円形	4.0	5.0	埋甕炉　中央部	岡谷後田原第Ⅱ	梨久保式土器の主要な要素をもつ(註7)
〃	〃	62号	楕円形	3.2	4.0	埋甕炉　中央部	縄文中期初頭	調査区のほぼ中央 (註7)
〃	〃	65号	円形	3.45	3.65	埋甕炉　中央やや東寄り	縄文中期初頭	調査区の西端 (〃)
〃	〃	66号	円形	2.5	2.65	埋甕炉　中央部	縄文中期初頭	調査区のほぼ中央62号住のすぐ南(註7)
〃	〃	78号	楕円形	4.3	2.3	埋甕炉	新道	東壁で81号住に切られ全体の¼程度残存 (註8)
〃	〃	80号	長円	4.0	3.5	埋甕炉	九兵衛尾根Ⅱ	今回の発掘したうちで最北東端の住居址 (註8)
〃	〃	99号	円形	3.5	不明	埋甕炉	九兵衛尾根Ⅰ	土壙の切り込み顕著 (註8)
伊那市平沢	丸山清水	5号	長円形	4.75	3.8	石囲み埋甕炉中央部	平出3A	(註9)
〃	八人塚	3号	円形	4.7	5.0	埋甕炉　中央部	縄文中期初頭	(註10)
〃	〃	4号	円形	3.7	4.0	埋甕炉　中心よりやや北寄り	縄文中期初頭	(〃)
〃	〃	7号	不明	不明	不明	埋甕炉	加曽利E	(〃)
西箕輪中条	天庄Ⅱ	2号	楕円形	5.6	4.6	埋甕炉　中央部	勝坂	顔面把手出土 (註11)

第Ⅴ章　まとめ

参考文献

（註１）・（註２）　長野県中央道埋蔵文化財包蔵地
発掘調査報告書（伊那市西春近）昭和47年度

（註３）中村遺跡（緊急発掘調査報告）1978
伊那市教育委員会・南信土地改良事務所刊

（註４）常輪寺下遺跡（緊急発掘調査報告）1975
伊那市教育委員会・南信土地改良事務所刊

（註５）カンバ垣外遺跡（緊急発掘調査報告）1979
伊那市教育委員会・南信土地改良事務所刊

（註６）月見松遺跡（緊急発掘調査報告書）1968.12
伊那市教育委員会刊

（註７）長野県中央道埋蔵文化財包蔵地
発掘調査報告書（伊那市内その２）昭和48年度

（註８）月見松遺跡（第Ⅲ次緊急発掘調査概報）1977
伊那市教育委員会刊

（註９）丸山清水遺跡（緊急発掘調査報告）1978
伊那市教育委員会・南信土地改良事務所刊

（註10）八人塚遺跡（緊急発掘調査報告）1979
伊那市教育委員会・南信土地改良事務所刊

（註11）天庄Ⅱ遺跡（緊急発掘調査報告）1980
伊那市教育委員会・関東農政局伊那西部農業水利事業所刊

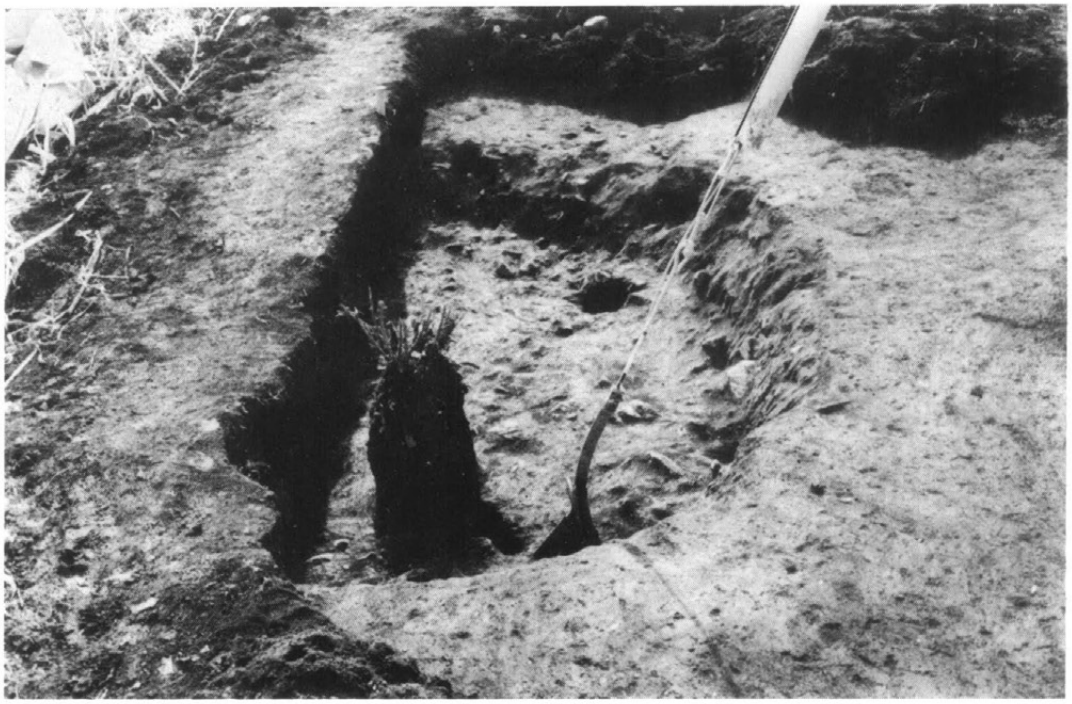
図　版

図版1　遺跡全景

遺跡地遠景（南側より眺む）

遺跡地遠景（北側より眺む）

図版2　遺　構



第１号住居址

第１号土壙

図版3　遺構及び遺物出土状況

第2号土壙

第3号土壙

第1号ロームマウンド

埋甕炉出土状況（第1号住居址）

図版4　出土遺物

第1号住居址埋甕炉土器

出　土　石　器

桜 畑 遺 跡

——緊急発掘調査報告——

昭和56年3月17日 印刷

昭和56年3月20日 発行

発行所 長野県伊那市教育委員会

印刷所 長野県長野市西和田470

信毎書籍印刷株式会社